原野先生のこと

柏 木 隆 雄

原野先生と初めてお会いしたのは，もう20年以上前，DNC（大学入試センター）のフランス語部会でのことでした。私は大阪大学文学部の助教授に来て間もない頃で，当時の部会長野村二郎先生から，委員をやってもらえないかという東京からのお電話に，国立大学の教員は，嫌も応もなく二つ返事で引き受けるものだと思って，はいと素直に答えたのでしたが，後で，柏木さんくらい，あっさり引き受ける人はいなかった，みんないろいろ事情を言われて断る方が多かったと聞かされて，しまったと後悔しても後の祭り。それから2年間，毎月1回，木，金，土と3日間東京駒場へ出かけたものです。

しかし，実はそれほど失敗でもなかったのです。そこで普通なら知り合いになれないような先生方と親しくなることができました。どうしてもややこしい議論になる部会のあと，渋谷あたりに揃って出かけての一献が，緊張やわだかまりをほぐし，翌日の会議の潤滑油となる。原野先生とはホテルも一緒のことも多く，一次会，二次会，時には2人だけの三次会といった具合につき合っていただき，たちまちファンになってしまいました。お昼の会議では，温厚な中に，学識に裏付けられた主張をきちんとされるし，細かい点にも注意を払って，ひとのうっかりミスを訂される。夜の席では，いつもにこやかに気を配り，お酒が相当はいっても泰然自若として崩れない。同じ部会の石井洋次郎さんと三人で二年間，よく議論し，飲んだものです。

DNCばかりでなく，この三人がちょうど同じ頃フランス語フランス文学会の編集委員になり，学会誌編集の改革というか，方針の再検討の小委員会にも同じように選ばれて，さらに親交が深まりました。原野先生の中庸を得た意見に何度も肯くことが多かったことを思い出します。そんな中1988年に広島大学に集中講義に来ないかとお誘いを受けました。実は私はその時まで集中講義の経験がなく，果たしてうまく出来るか不安でしたが，原野先生と一週間いろい

ろお話できると思うと，それこそ二つ返事で出かけたのです。ちょうど原野先生は杉山毅先生が退官されていて，お一人でフランス文学科を背負っておいでした。校舎もまだ八丁堀にあり，そこの宿舎（畳敷きの広い部屋でした）も懐かしい思い出です。八本松のお宅にも招んでいただいて，奥様の手料理，フランスワインなどをご馳走になりました。そのオードブルの一皿がことのほか美味しく，どのように作るのかお尋ねしても，奥様は笑ってお答えにならない。私は味と形を吟味して，おそらくこうするのだろうと，西宮の自宅に帰って試作してみました。もちろん本物にはかなわないのですが，ほぼ満足すべき味となりました。いま我が家でお客するときの定番となり，毎年正月院生たちとの我が家での飲み会でも必ず登場し，大好評のものとなっています。

しかし原野先生の真骨頂はもちろんその研究にあります。その成果がでるたびに専門を異にする私の方までも送っていただいて，いろいろ勉強することができました。まず『狐物語』の写本の綿密な校訂，その成果にもとづく『狐物語』についての一般的普及を意図しての概説書や従来の翻訳にない，清新で正確な全訳をあげなければなりません。そしてそれらが鈴木覚，福本直之両氏との緊密な共同作業で成し遂げられていることが，なによりも尊いように思います。古写本の校訂作業は，専門でない私からみても膨大な精力を必要とするもので，それを3人がチームワークを保って次々に成果をだされるのは，当然に見えてなかなか大変なことに違いありません。おそらくは原野先生の真面目で，温厚，かつバランス感覚の良さが，そうした3人のチームワークを固める一つの重要なエレメントとなったのではないか。長い原野先生とのおつきあいから考えて，私はそんな風に想像しています。

といいますのも，私がどんな小さな文章をお送りしても，すぐさま間髪を入れぬタイミングでお便りをくださり，親切なお褒めの言葉とともに，的を射たコメントが必ず添えられているからです。そうしたお心遣いにどれほど発奮したかわかりません。これは簡単なように見えて，私のような怠け者にはなかなか実行しがたいことなのです。私と仲間とで翻訳した『ジュール・ルナール全集』の月報執筆をお願いしたときも，作家ルナールと『狐物語』をひっかけた面白い文章を書いてくださいました。滑稽談を専門に研究する人が，案外，頑固な，融通のきかないところがある場合がありますが，原野先生は，まことに

ほどよいユーモアを心得た方であることは親しくなさっている方の一致した意見でしょう。

思えばこうして20年来，学恩に浴しているのわけですが，近頃お知り合いになった頃に増して，どんどん仕事をなさっていることに驚嘆と驚異の念を抑えることができません。単に『狐物語』関連のお仕事ばかりでなく，フランス中世全般についてのお仕事や，中世ヨーロッパを題材とした国際シンポジウムの開催や，その成果の刊行など，近年相次いで出される研究に，怠け者の身として，圧倒されるばかりです。本当の学者は，若い頃にも優れた才能を示し，しかも中年から老年に至ってますます円熟，幅広い視野と堅実な学殖がいよいよ冴えるものと聞きますが，まさしく近頃の原野先生のお仕事ぶりをみていると，そのことが納得されます。先生のご退職は広島大学にとって大きな痛手には違いないでしょうが，広い学術の面から見れば，ますます自由に，ますます闊達にお仕事ができる時間を手に入れられるわけで，原野先生にとっても，学界にとってもまことに喜ばしいことと申したいのです。